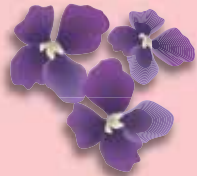


## 第44号

### ● 目次 ●

巻頭言：「東アジア出版文化国際研究拠点の形成」研究ユニットの第1期終結を迎えて	1
第1回東北大学リベラルアーツサロン報告	2
東北大学東北アジア研究センター 平成21年度公開講演会報告	3
シンポジウム「歴史の再定義 旧ソ連圏アジア諸国・地方における歴史記述と歴史認識」の開催	4-5
最近の研究会・セミナー等	
・研究会「東アジアの半島と島々の交流—古代・近代韓日文化交流の一断面」	6
・研究会「西シベリアチャニー湖沼群の生物群集と環境（第2回）」	6
客員教員紹介・新メンバー紹介	7
活動風景	8
編集後記	8

### 巻頭言



## 東北アジア研究センターのプロジェクト研究部門 「東アジア出版文化国際研究拠点の形成」 研究ユニットの第1期終結を迎えて

東北アジア研究センター 教授 磯部 彰

東北アジア研究センターでは、平成19年度にセンター組織を変更し、基礎研究部門とは別にプロジェクト研究部門を設け、外部との連携を進めて研究規模を拡大する体制をとりました。その折、幾つかの研究ユニットが創設されましたが、その一つに私が代表を務める「東アジア出版文化国際拠点の形成」研究ユニットがあります。この研究ユニットは、日本学術振興会のアジア・アフリカ学術基盤形成事業からの委託による資金で運営されることになり、平成19年4月に開始してより3年が経過し、平成22年度3月でその研究活動が終了することになりました。本ユニットは、文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジア出版文化の研究」などの東アジア出版文化をめぐる様々な研究プロジェクトを受け、主に日本と中国・韓国3ヶ国に研究拠点を設け、その連携とその拡張を目指したプロジェクトです。

研究の拠点として、日本では東北大学（仙台）に、韓国は高麗大学校（ソウル）に、中国は復旦大学（上海）に、それぞれコーディネーターを1名置いて、各国内及び外国の研究機関・研究者との連携を図りつつ、共同研究及び共同セミナー、研究者交流を実施して来ました。北海道伊達市での第1回セミナー開催（東北大学磯部彰・伊達市噴火湾文化研究所大島直所長共催）以来、主催校を代えつつ、仙台セミナー（東北大学磯部彰主催、第2回）、上海セミナー（復旦大学黄霖教授主催、第3回）、ソウルセミナー（高麗大学校崔溶澈教授主催、第4回）を順次実施してまいりました。セミナー開催時、黄霖教授・崔溶澈教授の高配のもとで、共同研究関連の資料調査や多くの研究者・院生学生と研究情報交換などを行うこともありました。また、東アジア出版文化展を開催し、アジア研究を目指す若手研究者の育成、一般市民への研究成果の広報と紹介などにも取り組みました。併せて、2008年には、日本学術振興会の助成を得て、「第4回東アジア出版文化に関する国際学術会議」を仙台で開催し、本研究ユニットを側面から補強しました。

3年間の研究活動のもとで拠点形成事業は大きく進展し、多方面に亘ってその成果が挙ってまいりました。日本・中

国・韓国の3ヶ国のみならず、台湾・ロシア・ニュージーランドの研究者ともひきつづき連携を取り、アジア・アフリカ学術基盤形成事業の一端としての責務を果たしました。その一方で、研究活動の報告を兼ねた論文集「東アジア出版文化研究」論集も制作中です。研究対象の多様性から、天つ空にきらめく星が学術の井に映るごとしという意味で、「ほしづくよ（星月夜）」と名づけました。

ユニット終了時には、外部の研究者による評価委員会を開催し、その評価を受けることが義務づけられています。私の研究ユニットでは、3月17日に実施することになっていますが、果たしてどのような評価になるのか、少々気がかりでもあります。

東アジア出版文化研究に関する研究ユニットを終了するに際し、問題がないわけではありません。それは、日中韓に研究拠点を樹立し、外国の研究者と幅広いネットワークを織り出しましたが、それをいかなる形で維持し、発展させるかということです。無形文化財とも言える組織は、絶えず刺激的電流を流さなければ、すぐにも雲散霧消してしまうでしょう。また、私の眼に見えるものが、他の人の眼にそのまま映るとは限らず、或いは、存在そのものが疑われるかもしれません。特定領域研究としてスタートした本事業は、その「取りまとめ研究」、「研究成果公开发表」と順次受け次ぎ、そして、本センターの研究ユニット及び日本学術振興会のアジア・アフリカ学術基盤形成事業という形で血脈を維持して来ました。来年度、その血統を保ち、研究ユニット第2期をスタートするか否か、これは評価委員会の判断事項です。



第4回セミナーの会場（高麗大学校仁村記念館）

## 第1回東北大学リベラルアーツサロン報告

東北大学リベラルアーツサロンは、幅広い文系研究の中からテーマを選び、中高生、大学生、社会人の皆様に、専門の講師がわかりやすく説明することを目的とするものです。そもそもリベラルアーツの語源は古代ギリシア語での「人間を自由にするための学問」にあって、現代では大学における幅広い分野の教養を身につけるための教育という意味を指すことが一般的なようです。開催場所は、せんだいメディアテークや、講師と直接議論しやすいコンパクトなスペースを会場に、隔月1回のペースで開催する予定です。参加者の皆さんと講師が、お茶を飲みながら会話に興じるサロンの雰囲気、誰でもその場で飲み物を片手に気軽に参加できるスタイルを目指しています。

初回は、私が講師を勤めさせていただいて、東北大川内キャンパスにある附属図書館の趣ある雰囲気の中、「地球温暖化問題を巡る政治と経済」をテーマに開催いたしました。

地球温暖化問題は、エネルギー安全保障問題であり、資源の分配問題でもあります。それ故に、科学と政治と経済のすべてに関わる複雑な問題になっています。その複雑さをときほぐして、問題の本質を少しでも明らかにするようなお話ができればと思って、このテーマを選びました。

当日の具体的な内容ですが、1)最初にちょっと科学の話、2)温暖化問題を説明することの「難しさ」、3)みなさんによる議論タイム、の三部構成にして、なるべくフランクな感じで行うことを心がけました。まず、いわゆる地球温暖化懐疑論について誤りを指摘したあと、温暖化問題を説明することの「難しさ」に関して、深くて広くて複雑(科学、政治、経済、倫理)、自分を棚上げしないといけない、遠い世界の話に聞こえてしまう(実感がわからない)、コストとベネフィットの計算が難しい、などの「本音」をお話しました。

最後の方の議論タイムでは、1)温暖化(対策)で誰が儲かるか?、2)温暖化(対策)で誰が損するか?、3)なぜ温暖化対策は進まないのか? の3つの問題に関して、10人程度のグループに分かれて議論してもらいました。学生や一般の方など約50名が各テーブルで侃々諤々の議論を展開してくれて、最後は、各テーブルの代表者に発表してもらいました。意外という用語弊があるかもしれませんが、予想以上に議論は盛り上がり、時間をかなりオーバーすることになりました。

反省点ですが、まず、もう少し議論に時間をとるべきでした。また、図書館という場所から、どうしても、大きな声を出しにくい雰囲気がありました。そして、お菓子や飲

み物が少々貧弱だったことも失敗でした。将来は、もし問題がなさそうでしたら、アルコールもあるとよいなと個人的には思いました(少々問題はありそうですが)。

(明日香壽川)



会場となった図書館



講演の様子



会場からの質問

## 東北大学東北アジア研究センター 平成21年度公開講演会報告

今年度の公開講演会は、2009年12月5日（土）14:30～17:00に、仙台市戦災復興記念館において、「日本と東北アジア 大地のつながり」というテーマで開催された。講師は東京大学大学院総合文化研究科教授の磯崎行雄先生と当センター教授の石渡 明である。

日本列島は、今から1500万年ほど前に大陸から分かれて太平洋側に移動し、あいだに日本海ができたと言われている。近年、わが国の地質学者が中国の各地やロシア極東地方で実施した調査の結果、日本海で隔てられる前の太古の日本と大陸の地質のつながりがわかってきた。この「東北アジア研究センター」にふさわしいテーマの講演会では、「日本と中国・朝鮮の地質のつながり」を磯崎先生が担当し、「日本とロシア東部の地質のつながり」を石渡が担当して、最新の研究成果を一般の人にわかりやすく解説することに努めた。事前の広報活動が充実していたためか、従来よりも多い68名の聴講者が来場し、用意した会場がほぼ満席になった。記帳した来場者には講演資料や当センターのパンフレットを配布し、会場の後部には当センターの紹介パネルを展示した。

当センターの岡 洋樹教授が司会を務め、当センター長の佐藤源之教授が開会のあいさつを行って、予定通りの時間に講演会が始まった。

磯崎先生の講演では、まず日本の地質と地球の歴史の概要について説明し、日本の地質は大部分が海洋プレートの沈み込みによって大陸プレートに付加された海洋底の堆積物（付加体）や海洋地殻（オフィオライト）でできているが、少量の大陸の破片も存在すること、地球上の大陸の離合集散（大陸移動）の歴史の中で何回か「超大陸」が形成されたこと（2億年前のパンゲア、10億年前のロディニアなど）、大陸と大洋の地質学的関係には太平洋型（沈み込み・付加型）と大西洋型（分裂・衝突型）の2種類があることなどが述べられた。そして、約7億年前の大陸分裂による太平洋の誕生とともに日本列島独自の地層の形成が開始されたこと、約2.5億年前（古生代の終わり）に北中国と南中国の大陸ブロックが衝突し、その間にヒマラヤ級の大山脈が形成されたこと、韓半島や日本列島のもとになった部分がこの衝突帯の東方延長として形成されたことなど先生の所説が述べられた。

石渡の講演では、まず今から約1500万年前の日本列島の大陸からの分裂と日本

海の拡大について述べ、日本の中部～西南部を構成するそれ以前の時代の付加体やオフィオライトがそのままロシア沿海州に続くことを、現地調査の資料を示しながら説明した。そしてアジア大陸東部では、環太平洋造山帯と、いくつかの大陸衝突型造山帯が、直角に交わるように分布し、日本の地質もこれら環太平洋型・大陸衝突型の両者の造山運動によって形成されてきたという考え方を述べ、この地域の金鉱床の種類や分布がこの2つのタイプの造山帯の分布とよく対応しているという最近のロシア人の研究結果を紹介した。

それぞれの講演の後では、聴講者から活発な質問があり、興味を持って聞いていただけたようである。当センター教員やコラボレーション・オフィス職員のご協力に感謝する。（石渡 明）



打合せをする講演者と司会者。左から磯崎先生、石渡、岡。



磯崎先生の講演の様子

## シンポジウム「歴史の再定義 旧ソ連圏アジア諸国・地方における歴史記述と歴史認識」の開催

本年度の東北アジア研究センター・シンポジウムは、「歴史の再定義」と題して、平成22年2月20日（土）～21日（日）に東北大学片平さくらホールで開催された。今回のシンポジウムは、共同研究「旧ソ連圏アジア地域の学術・教育におけるアイデンティティ再構築に関する研究」グループが企画・運営に当たったものである。

1990年代初頭の社会主義体制崩壊によるモスクワを中心とする放射状秩序の解体は、政治体制の転換に止まらず、唯物史観という発展史観を理論的基盤とした歴史認識上の根拠喪失と歴史アイデンティティの再構築をもたらした。本シンポジウムは、旧ソ連圏のモンゴル、ウズベキスタン、アゼルバイジャン、グルジア、ロシア連邦サハ共和国を事例として、体制崩壊後の歴史認識再構築の状況を比較検討した。各国別セッションでは、共同研究グループと当該国の歴史研究者の報告と中国史の立場からのコメントが行われた。

20日の第一セッション「モンゴルの事例」では、岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター）「モンゴルにおける清朝支配期に関する歴史記述の変化をめぐって」が、社会主義期から民主化後のモンゴル公定の歴史記述における清代史記述を比較検討、社会主義期の歴史記述における唯物史観と民族主義の共存と、民主化後に後者が前面に出てきたことなどを指摘した。ボル・ブンサルドラム（モンゴル科学アカデミー歴史研究所）「1911年モンゴル民族革命の歴史記述」は、モンゴルにおける歴史記述を20世紀前半、1950～1990年のマルクス主義歴史記述の時期、1990年以後の改革期に分け、特に1911年のモンゴル独立に関する歴史記述の変化を論じた。

「ウズベキスタンの事例」では浅村卓生（東北大学大学院国際文化研究科）「ウズベキスタンにおける国家史と国家語」が、ウズベキスタンの国家語ウズベク語に関して、文字改革と正書法の変遷を、キプチャク・ハン国、ティムール朝、シャイバーニ朝に遡る同国の歴史認識と関連づけながら論じた。エルキン・アフンジャノフ（ウズベキスタン、タシケント文化大学教授）「新旧のウズベキスタン史」は、同国の歴史記述史を、バルトリド、ヤクボフスキー、トルストフらの著作に代表される20世紀初頭から1950年代までの時期、公定の歴史編纂を

中心とする1950～1991年の時期、『新ウズベキスタン史』シリーズに代表される1991年以後の自立発展期に分けて回顧した。

「アゼルバイジャンの事例」では黒田卓（東北大学大学院国際文化研究科）「『ギーラーン共和国』（1920～1921）をめぐる歴史と歴史認識——バクーとモスクワ——」が、1920年にミールザー・クーチェク・ハーンら率いるジャンギャリー運動によるイラン社会主義ソヴィエト共和国（ギーラーン共和国）と、これへのアゼルバイジャンにおける社会主義政権成立の影響について、ソ連期と独立後の『アゼルバイジャン史』を比較しながら論じた。ジャミル・ハサンル（バクー国立大学）「アゼルバイジャン民主共和国の歴史記述——政治的状况と現実——」は、1918年から23ヶ月間存在したアゼルバイジャン民主共和国に関する独立後の関心の高まりと、これに関する客観的な歴史記述がなされ始めていることが論じられた。

21日「グルジアの事例」では北川誠一（東北大学大学院国際文化研究科）「南コーカサスにおける言語政策・言語政治・言語外交」が、グルジアとアゼルバイジャンの少数民族に対する言語・教育政策を比較検討、国境を越えた言語・教育政策の実行が、地域の安定化に繋がる可能性を指摘した。ヴァジャ・キクナツェ（グルジア、Iv.ジャヴァヒシシュヴィリ歴史・民族学研究所）「グルジアにおける1924年蜂起の問題とソ連及びポストソ連期歴史記述におけるその評価」は、1924年にグルジアで発生した反ソ蜂起に関わる近年の歴史評価を取り上げ、1990年以後の研究や史料出版を



シンポジウム会場にて

回顧し、反乱に関する近年の議論を紹介した。

「ロシア連邦サハ共和国の事例」では高倉浩樹（東北大学東北アジア研究センター）が「歴史研究における政治と宗教：1990年代サハ共和国におけるナショナリズム」と題して、1990年以後のサハ・オムクやサハ・ケスキレ、Kut-Siurなどの民族文化復興運動組織の活動、国家宗教「Ayi」の創設などの文化状況を論じた。アンドリアン・ボリソフ（ロシア科学アカデミー・シベリア支部人文学・北方民族問題研究所）「20世紀初頭以前のヤクート社会史に関するソ連および現代歴史記述」は、社会主義期における社会経済的関係や所有関係、階級闘争などに関する歴史記述を回顧し、大領主ティギンの評価を中心に、1990以後民族誌・フォークロア史料による文明論的歴史記述の動向を論じた。

最後に21日午後の総合討論では、上野稔弘（東北大学東北アジア研究センター）より、中国における時代区分・認識、民族主義的傾向の特徴が紹介された。

シンポジウムの報告と議論から、各国で民族主義的傾向をもつ独自の歴史認識構築が進んでいることが明らかになった。唯物史観の普遍性に対して、新しい歴史記述は、各国の歴史と民族文化の独自性を主張している。しかし、それが将来にわたって孤立した歴史認識として定着していくのか、あるいはより広い地域枠組みの中に自己の位置を見出していくのかは明らかではない。現地研究者の報告では、総じてソ連時代の歴史研究・記述への強い反省と、体制崩壊後の研究の新鮮さが強調された。その一方で各国の研究者が社会主義期の歴史研究方法から脱却しえていないことも指摘された。その意味で旧ソ連圏諸国の歴史記述はなお過渡期にある。ウズベキスタンやアゼルバイジャンでは、1920年代のソヴィエトによる介入以来のソ連支配への反発と、1920年代短期間に終わった独自の国家形成の意義が強調される。ロシア連邦構成共和国であるサハでは、エリートや知識人によるアイデンティティ構築が、特に文化面で進んでいる。これらの

国々では、近代的民族・国家の形成自体がまさに批判の対象となっているロシア・ソ連の支配期と重なるという問題がある。モンゴルの民族主義的歴史記述はロシア以上に中国を意識する傾向があり、民族主義の構図がやや異なる。一方グルジアでは、数千年に及ぶ古い文明としての自己認識から、ロシア・ソ連の支配が評価されている。各国の歴史記述・認識の動向を一つの枠組みで理解することは困難だが、ソ連体制の歴史的意義を、これらの国々が「共有」する歴史研究の課題として、相互に比較しながら考察対象とする価値はあると思われた。

（岡 洋樹）



シンポジウム参加者



討論の様子



## 最近のセンター研究会



### 東北大学東北アジア研究センター・ 高麗大学校日本研究センターとの学術交流研究会 「東アジアの半島と島々の交流ー古代・近代韓日文化交流の一断面」

平成22年1月19日に、東北アジア研究センターにて、学術交流協定の締結先である韓国高麗大学校日本研究センターの宋浣範（ソンワンボン）先生と全成坤（チョンジョンゴン）先生による研究発表が行われました。

まず、全成坤先生が「コロニアリズム装置としての建国大学と朝鮮半島の人々」と題して、崔南善のアジア観を通して、民族というものは時代によって変化し、作られていくという点を詳しく紹介しました。崔南善は、旧満洲国に設立された建国大学に当時の朝鮮から招聘され、教授となった人物でした。

次に、宋浣範先生が「桓武天皇と百済王氏」という題目で、古代律令制の確立を推し進める桓武朝廷が、百済系氏族の後見役の立場を占めるに到った百済王氏を優遇した背景とその理由について、律令官人化された百済王氏の行動に基づいて報告しました。全先生・宋先生いずれも詳細な発表論文を用意し、両先生ともに日本語で発表しましたが、残念なことに、時間の都合でその一端をいただくだけに止まりました。日韓関係についての議論は、かつては、研究よりも感情論が先立つ傾向がありましたが、最近では研究を通して正確に相互を理解することが本格化しています。日韓交流史では、安土桃

山時代や近代が取り上げられることが多いのは当然ですが、韓半島側から日本秋津島の古代から中世、近代、そして近代、現代をどのように見ていたのかについて知ることも重要です。現在、韓国では、高麗大学校の日本研究センターが日本研究の先駆的な役割を果たし、日本の文化・歴史・文学など多方面の紹介をしています。現在、過去、そして未来の日韓関係は、東北大学のみならず、日本全体にとって重要事項です。今後両センターの交流を通し、研究と相互認識をより深めたいと考えています。



宋浣範先生の講演風景

宋浣範先生、全成坤先生は高麗大学校日本研究センターに所属され、目下、センター長崔官先生のもとで日本文学辞典の編集に携わっています。（磯部 彰）

### 研究会 「西シベリアチャニー湖沼群の生物群集と環境（第2回）」



2010年1月12日（火）の13:30～15:30に、東北アジア研究センター大会議室において「西シベリアチャニー湖沼群の生物群集と環境（第2回）」

と題した研究会が開かれた。この研究会では、共同研究「西シベリア塩性湖チャニー湖における高次消費者を中心とした生態系解析」の最終年度にあたり研究成果のとりまとめのために、2009年11月17日に開催された第1回の研究会に引き続き、前回来日できなかったロシア科学アカデミーシベリア支部動物分類学研究所の2名の研

究者を招へいして行われた。今回来日した研究者は、動物分類学研究所のビクトル・グルーポフ所長とエレナ・ズイコーバ研究員で、それぞれ主に「昆虫とその病原生物」および「動物プランクトン群集」について研究を行っている。次の2つの報告が英語によって行われた。

1. エレナ・ズイコーバ、チャニー湖の*Daphnia*属のいくつかの種における形態的遺伝的分化  
Elena Zuykova (Institute of Systematic and Ecology of Animals, SB RAS), "Morphological and genetic differentiation of some species of genus *Daphnia* in Chany Lake"
2. ビクトル・グルーポフ、虫性病原体の生物多様性と昆虫の個体群動態のメカニズム  
Viktor Glupov (Director, Institute of Systematic and Ecology of Animals, SB RAS), "Biodiversity of entomopathogens and mechanism of population dynamic of insects" (鹿野秀一)

## 客員教員紹介

### 曹三相（ジョー・サムサン）講師



研究室にて

曹三相先生（ジョー先生）は、本年1月1日から5月31日まで本センターの客員教員として滞在しておられます。1968年に韓国で生まれ、釜山大学、アメリカのサウスカロライナ大学等で

学ばれた後、現在釜山大学韓国研究所の研究員として、韓国を中心に広く東北アジアの国際関係論、国際政治学の研究を行っている有能な若手研究者です。その視野はとて広く、もともとヨーロッパの国際関係を研究しておられましたが、次第に研究対象をアジア地域にシフトされて今日に至っています。それゆえ、米、仏、独への留学経験をもち、英語、独語、仏語、韓国語、日本語、中国語を駆使しながら、単なる日韓関係、韓中関係といった限られた視点ではない国際的な研究を行ってお

れます。その意味で、まさに新世代の研究者として嘱望されるべき資質をおもちの方です。

本センターには国際関係論や国際政治の専門研究者はおりませんが、センターの標榜する東北アジア総合地域学を押し進めてゆくためには、このような政治、経済の領域を扱う社会科学は必須の要素です。また、本センターのスタッフの中にも、私のように東北アジア地域での民族間関係や人口移動の問題を扱っている研究者がいます。私の視点は文化人類学ですので、必ずしも政治学や経済学のそのように国家や地域を全体的に捉えるマクロなものの見方とは異なりますが、同じく地域の主要な問題をテーマとし、それを互いに異なった手法を用いて研究してゆくことを通じ、多くの新しい視点が開けると確信しています。

ジョー先生は仙台の生活も大変気に入っておられ、来仙早々にスキー場に行かれたり、市内の散策を楽しんだりしておられます。高度に洗練された知性をもちながらソフトで気さくな人柄は、その意味でも新世代の研究者と呼ぶのが相応しい方です。（瀬川昌久）

## センター新メンバー紹介

### アンドレイ・クロコフ（教育研究支援者）



東北アジア研究センターに教育研究支援者として採用されたアンドレイ・クロコフです。私はロシア・アルタイ地方ビスクで1983年に生まれ、トムスクで大学を終えました。

トムスク州は西シベリア平原の南に位置しオムスク、ノボシビルスク、クラスノヤルスクなどと隣接し人口は約110万人です。地域の57%は森林や湿地で覆われています。石油、天然ガスを産出し、石油精製や化学製品製造が主要産業です。トム川の沿岸に位置するトムスク市が州都であり州の約半分が住んでいます。トムスク市は1604年にツァーリ ボリス・ゴドゥノフによって建設が始まりましたが、現在では歴史的な街並みと高等教育機関や文化施設の多さに特徴があります。20以上の高等研究機関に加え工学、医学、文化、教育などの多くの専門学校があり、85,000人の学生が住む学生の街でもあります。

私はトムスク国立大学電波物理学部に2000年に入学し

ました。トムスク国立大学はロシアで最も古い大学の一つであり、ウラル地方と太平洋に挟まれた地域で最初の高等教育機関です。大学は1878年に創設され博物館と植物標本館が整備され、1888年に4つの学部で開学しました。博物館の展示物は大学の講義に活用されるだけでなく一般市民にも開放されています。研究機関は大学と切り離すことのできない組織であり、学生は物理・技術研究所、応用物理・数学研究所、生物・生態学研究所、シベリア植物園などで研究を行っています。現在トムスク国立大学は25の学部を持ち、25,000人の学生が在籍しています。

私は超広帯域（UWB）レーダを用いた計測法の研究を、2002年から森林を対象とした実験から開始し、主として森林中の電波伝搬に関する研究を行ってきました。広帯域パルスレーダによる森林トモグラフィのテーマで2006年に修士、2009年に博士をヤクポフ教授の指導の下、修了しました。東北アジア研究センターでは佐藤教授と森林、氷厚など環境計測へのレーダ応用に関する研究に従事します。



## 活動風景 ロシア交流推進室の発足 (2009年12月)と活動について

東北アジア研究センター 助手 徳田由佳子

2009年7月、文部科学省は「国際化拠点整備事業(グローバル30)」の平成21年度採択拠点を発表しました。これは、福田内閣で提唱した「留学生30万人計画」の計画達成のために留学生の受入体制を整え国際化拠点として活動する大学を選定したもので、この時点では国立大学7校、私立大学6校、合計13校が決定されました。優秀な外国人学生と日本人学生が切磋琢磨することで、国際的な活躍が期待できるような人材を養成することもこの事業の重要な目的の1つとなっています。今回採択された拠点大学では海外での広報活動も兼ね、それぞれ割り当てられた国に日本留学の窓口となる「海外大学共同利用事務所」を設けることが定められています。東北大学ではロシアを担当することになりました。

この決定を受け、グローバル30の事業を戦略的に遂行するため、東北大学では特定事業組織として「ロシア交流推進室」を発足させました。構成メンバーは共同研究などで既にロシアとの交流を持つ教員が中心となっており、室長には木島明博副学長、副室長には当センター工藤純一教授が就任しました。複数の部局を代表するメンバーが参加する体制が取られており、当センターからは佐藤源之センター長、寺山恭輔准教授、高倉浩樹准教授、塩谷昌史助教と筆者の計6名が室員として協力することになりました。

現在、東北大学はロシア国内に2つの拠点を設けています。1つはモスクワ大学内にある「東北大学リエゾンオフィス」、そしてもう1つはノボシビルスク市(シベリア)にあるロシア科学アカデミーシベリア支部との「共同ラボラトリ」です。推進室では「海外大学共同利用事務所」の整備を最優先課題として挙げており、まずは既にあるこれらの拠点を利用する形で整備していく方針が確認されました。このために塩谷昌史助教が室員として、今月上旬(平成22年2月)から1ヶ月間の予定でモスクワ大学との調整にあたっています。モスクワの事務所は優秀な学生、研究生を東北大学のみならず日本国内の大学へ紹介するという重要な役割を担うことになっています。ヨーロッパが近いというモスクワの地理的条件と、全く異なる生活様式や言語の国で生活しなくてはならないという問題から、日本へ留学しようという学生はそれほど多くないかもしれません。そういった不利な要素を払拭するような日本の魅力、東北大学の魅力を如何にアピールしていくかがこれからの課題になると思われます。

ノボシビルスクの事務所でももちろん優秀な留学生の発掘に力を入れることになっています。しかしその他にもロシア科学アカデミーシベリア支部のお膝元という絶好の環境を活かし、研究者レベルでの交流にも力を入れて行くこととなります。現在行われている共同研究はもちろん、新たなプロジェクトを立ち上げるための支援(主に情報提供面での支援)が理想的に行えるような体制をロシア側のワーキンググループと共に築いていく計画です。グローバル30は5年間のプロジェクトですが、東北大学ではこれを5年間の活動として捉えるのではなく、長期的で建設的な日露協力関係の構築を視野に入れた、そのための土台作りの活動として積極的に取り組んでいく構えです。



教室に入りきれないほど集まったノボシビルスク大学の学生たち('09.11.19 出前講座)



モスクワ大学本部

編集  
後記

本年度最後のニューズレター44号をお届けします。私自身は2月半ばにモスクワで歴史関係者十数人と面談インタビューしてきました。今年はロシアにとって戦勝65周年にあたりますが、旧ソ連諸国や東欧諸国と歴史認識の問題でもめているのは、東北アジア地域の状況と似ているところがあります。それよりも昨年秋にメドヴェージェフ大統領がビデオブログという形式で行った痛烈なスターリン批判は、プーチン路線とも一線を画しリベラルな大統領像を印象付けるものでした。ちょうど2年後のロシア大統領選挙の行方が注目されます。(寺山恭輔)

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第44号 2010年3月31日発行  
発行 東北大学東北アジア研究センター 編集 東北アジア研究センター広報情報委員会  
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地 東北大学東北アジア研究センター  
PHONE 022-795-6009 FAX 022-795-6010  
<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>